② 大　塚　誠之助　氏　（国後島元島民）

１０歳まで国後島の南にある泊村（とまりむら）で生まれ育ちました。

終戦時、国後島には 7,364 人、択捉島には 3,608 人、色丹島には 1,038 人、歯舞群島には 5,281 人、北方四島全体で 17,291 人の日本人が住んでいました。

北方領土の近海は、南から暖流（黒潮）北からは寒流（親潮）が流れ、冬の気温は根室と同じくらいで、十勝地方から比べると、わりと暖かい地域です。一番寒い１月、２月でも－６℃くらいで、夏の平均気温は 16℃です。夏はガス（濃い霧）が良く発生するため、日照時間が少ないことから、気温はあまり上がることはありません。

島では、キャベツやジャガイモ、カボチャなどが収穫できますが、トマトは赤くなりません。

北方領土は、寒流と暖流がぶつかるところなので、昔から世界の三大漁場の一つと呼ばれ、水産資源がとても豊富でした。四島の３分の２くらいの島民は、漁業に従事していました。また、関連した水産加工に従事する人もいました。島には千島火山帯が走っているので、硫黄などの鉱山の採掘もありました。林業に従事する人もいました。

国後島では 3,000 頭くらいの馬が飼われていました。戦争中は軍馬として供給していました。

水産資源はホタテ・タラバガニ・サケなどが中心でした。戦前は輸出用の缶詰の加工が盛んでした。当時は今のような冷凍技術がなかったので、塩漬けや、乾物、缶詰に加工していました。

私の住んでいた国後島は、標津町の野付半島にある尾岱沼（おだいとう）から最短距離で 16㎞しか離れていません。

私の住んでいた泊村は、120 世帯で 600 人くらいの人々が住んでいました。私は、本村から東側にあるウイエンナイというところで、10 歳まで生活していました。私の父も、1901 年（明治 34 年）に国後島で生まれました。明治時代に先祖が国後島へ移住しましたので、私で４代目となります。

私の家は、商店や水産加工を経営していましたが、輸出用の缶詰経営もしていました。タラバガニやホタテの貝柱などを横浜の業者から注文を受け、輸出を行っていました。

私の住んでいた泊湾地区だけでも、1,300 人くらい住んでいました。18 世紀の後半から、日

本人がたくさん移住するようになりました。そのころ、ロシア人もカムチャッカ半島から南下してきたので、日本の政府（当時の幕府）は、1786 年に幕府の役人であった最上徳内（もがみとくない）などを派遣し、間もなく北方領土を幕府の所轄としました。江戸時代の 1835 年（天保６年）に御影石でできた神社の鳥居が作られました。その頃から日本人が住んでいたという証になっています。

私は、小学４年生の途中まで、島で生活していましたが、国後島は自然に恵まれた島でした。

私の住んでいた泊湾内は遠浅の海で、潮が引くと 100mくらいの干潟ができて、粒の大きいアサリがたくさん捕れました。また、この地域では北海シマエビやタラバガニ、カレイ、ホタテなどもたくさん捕れました。家のすぐ前には川もあり、そこには孵化場もありました。川にはサケ・マスがたくさん遡上していました。子供のころは、手作りのヤスで大きなサケを捕ったりしていました。

家の近くは海だったので、ハマナスがたくさん咲いておりました。また、フレップ（今でいうとハスカップ）と言われている野生の木の実がたくさんあり、島では自然に恵まれた生活していました。

当時、島での明かりはランプでした。ランプの火屋の部分の掃除をするのは、子供の仕事でした。

冬になると湾内は凍ってしまうので、漁師たちは仕事になりません。氷を割り、自家用でコマイやカジカを水揚げしていました。子供達もコマイを捕まえるために、薪を割るマサカリで氷に穴を空けて、手製の釣り針で魚を捕りました。また、氷の上はつるつるなので、手製のそりに帆のかわりに筵を立てて、氷の上を走りました。氷の上ではスケート遊びもしました。とても楽しく子供時代を過ごしました。

1945 年（昭和 20 年）8月 15 日に終戦を迎えました。終戦後、ソ連軍は北方領土を攻めて来ました。

当時、日本とソ連との間では、昭和 16 年の太平洋戦争が始まった年に日ソ中立条約を締結しており、５年間は戦争しないと約束していましたが、ソ連軍は有効だったこの中立条約を無視して、カムチャッカ半島から攻め込んできました。

そのころ、シュムシュ島には日本兵が 20,000 人くらいおり、終戦後、間もなくソ連軍と争いをしましたが、武装解除の命令があり、日本軍は降伏し、その後日本兵はシベリアに抑留されました。そのソ連軍の部隊はカムチャッカ半島からウルップ島まで南下してきたようですが、樺太（サハリン）から来た部隊だったようです。

ソ連軍が択捉島に入ってきたのは８月 28 日でした。その後、国後島、色丹島、歯舞群島を攻めて来ました。

私の住んでいた集落にソ連軍が来たのは９月２日でした。島民はソ連軍をあまり怖く思っていませんでした。樺太の真岡（まおか）というところでは、ソ連軍が来たことで集団自殺した事件があったようですが、私の集落では怖いことはありませんでした。ただ、女の子のいる家庭の中には、心配して押入れや屋根裏に女の子を隠した家庭もあったようでした。

私が住んでいたウエンナイには、馬に乗った将校が一人でやって来ました。その将校はズボンの赤いラインを指差しました。私の父はロシア語はわかりませんが、家に赤い物を立てることを求めていることに気がついて、缶詰工場の赤い旗を屋根の上に立てたところ、将校は喜んで帰っていきました。当時、私は小学４年生でしたが、今でもその記憶は鮮明に覚えています。

私たちの集落ではあまり怖い思いはしませんでしたが、本村にもソ連兵が入っており、このままソ連兵が永住すると大変なことになると思い、９月５日過ぎから北海道へ逃げ出す者がいました。

私の家族も、父親だけ島に残し、手当たり次第持てる物を持ち、近所の船に便乗し、真夜中に北海道に逃げてきました。その後、父も脱出し、別海町の走古丹（はしりこたん）というところで１か月間生活をして、根室、そして網走に行きました。なぜ網走に行ったかというと、チャンスがあれば島に帰りたいという気持ちがあったからです。

昭和 22 年からは島に残ったすべての人たちが強制的に送還されました。北方領土には、17,291 人の日本人が住んでいましたが、そのうち半分の人は島に残っていました。択捉島は北海道から遠いため、脱出できないことから、全員が島に残っていました。国後島、色丹島でも半分くらいは残っていました。その島民は、まず樺太に連れていかれ、その後、函館に送還させられました。その以降、北方領土には日本人は住んでいません。

脱出して北海道に来ても、生活基盤がなかったので大変でした。引揚者はみんな生活基盤がありません。北海道に来てからは、大変な生活を強いられました。

私達一家は、引き揚げてから別海、根室、網走、札幌と道内を転々としました。学校も次々と変わり大変でしたが、親はもっと大変だったと思います。中学３年生の時、修学旅行で道東の阿寒に行く予定だったのですが、親を見ると、とても行けるような状況ではありません。自分から辞退しました。高校生になって、やっと親の商店経営が軌道に乗ったので、普通の生活ができるようになりました。中学生までは、大変つらい思いをしました。

樺太経由で強制送還された方々も大変な思いをしました。ロシアの貨物船に乗船するときは、荷物を運ぶ網でできたモッコにウインチで吊り上げられ、貨物船に積み込まれました。そのときモッコから滑り、海に落ちる人もいました。船内でもつらい思いをしたようです。トイレが垂れ流しだったため、特に女性の方はとても困ったようです。

樺太の真岡に上陸してからも、つらい思いをしました。真岡には１、２ヶ月いました。収容所になったのは女学校でしたが、食糧難で餓死した人もいたようです。

私のいた集落では、私たち家族が引き揚げた後の話ですが、ソ連兵が泥棒に入ったときに阻止

しようとした前村長が銃で撃たれて亡くなることがあったそうです。

また、色丹島では、小学校の授業中にソ連兵が銃を持って学校に入ってきて、子供たちは大変怖い思いをしたそうです。

日露の国境の変遷を見ると、まず、1855 年に日本とロシアは日魯通好条約を結んでいます。この条約により、択捉島とウルップ島の間に、初めて日本とロシアの国境が決められました。当時の暦では 12 月 21 日です。新暦になおすと２月７日に当たります。昭和 56 年に閣議決定により、この２月７日を「北方領土の日」と定めました。この日は全国各地で返還要求運動を行っています。東京、根室、札幌でも大きな大会を開催しています。札幌では、大通公園の雪まつり会場で、署名活動を行っています。

1875 年には樺太千島交換条約を締結しました。この条約では、日本は樺太を放棄し、千島列島のすべてが日本の領土となりました。当時の日本は明治維新からまもないアジアの小国で、ロシアは大帝国でした。力関係はロシアの方が上です。その時に結ばれた条約です。

1905 年のポーツマス条約では、日露戦争の結果、日本が勝ち、アメリカのポーツマスで条約を結び、樺太の南半分をロシアから割譲しました。

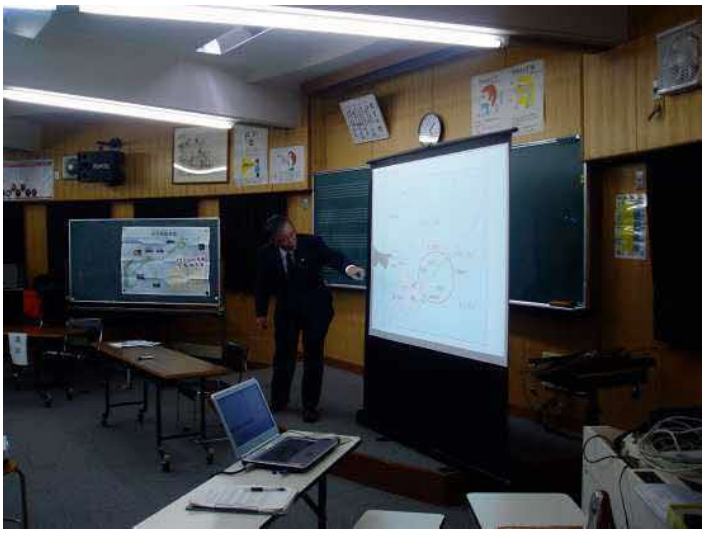
1951 年のサンフランシスコ平和条約では、樺太の南半分と千島列島を放棄しました。しかし、千島列島には北方領土は含まれていません。

現在、ロシア政府は、北方領土は第二次世界大戦の結果、得た領土であり、島をもらうのは当然であると言っていますが、歴史的経緯からみても、北方領土は明らかに日本の領土です。

ロシアから譲歩を引き出すためには、日本国内での世論を統一しなければいけません。私は７７歳となりました。今後は皆さんのような若い方に返還要求運動を引き継いでいただきたいと思っています。

北方領土問題は、私たち元島民や根室管内の地域の人たちだけの問題ではないのです。日本国の国益、主権の問題です。日本人として北方領土問題をあきらめてはいけません。

＜訪問校＞

・苫小牧市立弥生中学校（平成２４年１０月１２日（金））

・島牧村立島牧中学校（平成２４年１１月３０日（金））